

G-5 小学校と年被服製作学習(ふくろづくり)についての児童の意識調査
広島大教育○石渡すみ江 大妻女大家政 大山サカエ 岩手大 清水房

目的 小学校被服製作学習の中で、ふくろづくりの実際の学習に対して、児童がどのような意識をもっているかと、製作品に対する教師の評価に対して調査し、教材の選択および学習指導に役立てようとするものである。

方法 調査対象は広島市内1校80人、東京都3校155人、盛岡市内2校116人、調査時期は昭和46年11～12月で製作完了直後、調査内容はふくろづくりの各作業に対する児童の難易の意識、興味、できばえの自己評価、児童の製作品に対する教師の評価(A、B、Cの3段階とする。)

結果 ①作業に対する難易の意識で、もっともむずかしいのは、口あきどまりをとめる、口あきをつくるで、困難度は中程度である。②作業への興味で、もっとも高いのは、ひもを通す、2枚の布を縫い合わせるで、かなりの興味がある。③作業に対する自己評価は、ひもを通す、ひもの長さをきめるがもっとも高く評価されている。④作業に対する難易の意識と興味との順位相関は有意ではなかった。⑤作業に対する難易の意識と自己評価の順位相関は高い逆相関が認められた。⑥作業に対する自己評価と興味との順位相関は、男子、女子の各場合に相関が認められた。⑦製作品に対する教師の評価A、B、Cの各段階における児童の各作業への難易の意識および自己評価の傾向は、A、B、B、C、A、Cの各間に相関が認められた。⑧製作品に対する児童の評価と教師の評価との相関は全員の場合1%水準で有意であった。

以上の結果からみて、ふくろづくりは児童の意識からは適当な教材と思われる。